

ヘレニズム時代における 「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる論争⁽¹⁾

田 中 龍 山

はじめに

「感情のない状態（アパテイア）」とは、古代ギリシア、とりわけヘレニズム時代において、ストア派によって主張された、わたしたちの心の理想的なあり方である。これまでの日本語では「不動心」と訳されることもあり⁽²⁾、ストア派の禁欲主義的な主張の究極として魅力を感じさせる概念であろう。しかしながら、すべての感情から解放されるという極端にも見える立場には、その現実性などに疑問や批判が投げかけられてきた。そして、そのことはストア派の哲学者たちにも自覚されており、他学派との論争の中で、自身の立場をより明確にする必要に迫られることになったのである。たとえばそれは、紀元一世紀に活躍したセネカ（前 1- 後 65）による次の証言から見て取ることができる。

証言 1

「感情を節度をもって（modicos）持つのがいいのか、まったく（nullos）持たない方がいいのかについては、何度も問題にされてきた。わたしたち〔ストア派〕はそれを追放しようとするのに対して、ペリパトス派の人はそれを穏やかにしようとする」セネカ『書簡集』116.1.

本論の目的は、「感情のない状態（アパテイア）」概念の内実を、この論争を追跡することによって明らかにすることである。手順は以下となる。まず

第1章では、「アパテイア」という概念が確立されていく過程を確認する。そして第2章では、それに対する批判を取り上げる。その際には、上の証言にみられるように、「節度をもって感情を持つ（メトリオパテイア）」という立場が、論敵の立場として示されることになるだろう。つづく第3章では、ストア派からの反論を考察する。それは、論敵が示した「メトリオパテイア」概念への批判として行われたものである。最後の第4章では、論争の中でストア派によって強調されることになった「よい感情（エウパテイア）」に焦点を当て、論敵の立場との融合を指摘したい。それが本論での主たる主張となる。

第1章 「感情のない状態（アパテイア）」概念の成立

1-1 アンティステネス（キュニコス派）

「感情のない状態（アパテイア）」の成立に関して、まず最初に取り上げるべきは、三世紀前半に活躍したディオゲネス・ラエルティオスが伝える以下の証言であろう。

証言 2

「アンティステネスは、ソクラテスから「忍耐強さ（カルテリコン）」を学び、また「感情のないあり方（アパテス）」を見習い、そうして「キュニコスの生き方」の創始者となった」DL.6.2

アンティステネス（446-366）とは、この証言で言われている通り、小ソクラテス学派の一つである「キュニコス派」の創始者とされる。同じくディオゲネス・ラエルティオスの証言によると、アンティステネスは、快楽を徹底的に拒み（DL.6.3）、徳の自足性を主張するとともに（DL.6.11）、きわめてみすばらしい生活をしていたとのことである（DL.6.105）。そのアンティス

テネスは、「感情のないあり方（ト・アパテス）」を「ソクラテスから見習った」とこの証言は伝えている。ソクラテスに由来するという点については、のちに考察するとして、まず「ト・アパテス（τὸ ἀπαθές）」という表現に注目したい。それは、「アパテース（ἀπαθής 感情のない）」という形容詞が中性名詞化されたものであり、感情のないあり方を意味する。そのことから推測されるのは、まだ「アパテイア」という概念はアンティステネスがキュニコス派を開いた時点では定着してはおらず、事柄として語られていたにすぎない、ということであろう。そのことは、ディオゲネス・ラエルティオスの次の証言からも見て取れる。

証言 3

「この人〔アンティステネス〕はまた、ディオゲネスの「感情のない状態（アパテイア）」や、クラテスの「自制心（エンクラティア）」、そしてゼノンの「忍耐強さ（カルテリア）」といった考え方に道を開いた」DL.6.15

まず、ここで登場する人物を説明しておこう。ディオゲネス（ca.412-323）とは、「シノペのディオゲネス」、あるいは「樽のディオゲネス」として知られる、キュニコス派の哲学者である。クラテス（325 頃活躍）もキュニコス派の「テーバイのクラテス」である。そしてゼノン（335-263）は後のストア派の創始者となる人物である。

この証言で最初に注目したいのは、それぞれの人物に帰せられている「アパテイア」「エンクラティア」「カルテリア」といった言葉が、状態を示す名詞として概念化されている点である。「といった考え方」と翻訳されているのはそういった意味合いをふまえてのことであろう。つまり、「アパテイア」に限定して述べると、アンティステネスにおいては、一つの心のあの方として語られていた「アパテス」が、ディオゲネスにおいては、学派の考え方として定着していた、ということが読み取れるのである。「道を開いた」とい

う言葉もそのことを示しているだろう。ストア派の人たちは感情に関する多くの書物を書いたと伝えられるが、『感情のない状態（アパテイア）について』というタイトルの書は、このディオゲネスのみである⁽³⁾。

そしてもう一つ注目したいのは、ストア派の創始者であるゼノンとの連続性である。キュニコス派の哲学については、伝えられる断片が圧倒的に少なく、その全体像を知ることはむづかしい。だが指摘されているように⁽⁴⁾、すでにアンティステネスにおいて、ストア派の「倫理学の根」と言えるものが見いだされることは確実であろう。ディオゲネス・ラエルティオスの証言からは、アンティステネスの語る「アパテス」がディオゲネスの「アパテイア」を経て、さらにストア派に引き継がれたことが読みとれるのである。

1-2 ソクラテス

しかしながら、アンティステネスは小ソクラテス学派に位置付けられ、先の証言2では、「感情のないあり方（アパテス）」を「ソクラテスから見習った」と語られてはいるが、実はソクラテスにその言葉は見いだされない。たしかに、身体的欲求ではなく魂の世話をすることの重要性を、ソクラテスは繰り返し主張する。だが、ソクラテスが主張したのは、感情をなくすことではなかった。むしろ、プラトンの対話篇の中では、次のようなソクラテスと対話相手とのやり取りが見いだされるのである。

証言 4

「立派な人物というものは」とぼく〔ソクラテス〕は言った「息子を失うとか、その他何か自分がもっとも大切にしているものを失うとか、そういった運命を身に受けたとき、他のだれよりも平静にそれを耐え忍ぶだろうということ、ここまでのことは、あのときもたしか、わたしたちは言っていたはずだ」

「ええたしかに」

「いまはさらに、こういうことを考えてみようではないか。いったい、そういう人物は、何ひとつ悲しくないのだろうか。それとも、そういうことはありえないことであって、苦痛（リュペー）に耐えて節度を保とう（メトリアゼイン）としているのだろうか」

「実情を言えば、後者の方でしょう」と彼〔グラウコン〕は言った」プラトン『国家』 603e3-9

もちろんここでは、「アパテース」という言葉は使われておらず、そういったことが概念化されているわけでもない。しかし、「何ひとつ悲しくない」という心のあり方が語られていることは明らかである。そしてそのことをソクラテスは「ありえないこと」とみなし、それとの対比で「節度を保つ」ことが「立派な人物」の心のあり方であると主張しているのである。このことには留意しておきたい。

1-3 アリストテレス

さて「アパテイア」概念をめぐる、年代的に、ソクラテス（ca.470-399）から小ソクラテス学派「キュニコス派」のアンティステネス（446-366）とディオゲネス（ca.412-323）へ、そして「ストア派」のゼノン（335-263）へのつながりが確認できたが、アリストテレス（384-322）による証言も触れておこう。アリストテレスには、明確に「アパテイア」概念への言及が見いだされる。

証言 5

「ある人たちは徳を、一種の「感情のない状態（アパテイア）」「平静の状態（ヘーレミア）」とさえ定義する。だがしかし、これは誤っている。な

ぜなら、彼らは無条件にそのようなことを言っており、そうした状態になるべき仕方とそうでない仕方、なるべき時とそうでないとき、あるいはその他、付け加えられるべき同様の限定条件について、何も語ってはいないからである」アリストテレス『ニコマコス倫理学』1104b24-26

誰が「徳をアパテイアと定義」しているのか、それをアリストテレスは語っていないが、先にみた年代的なつながりと照らし合わせると、キュニコス派の人たち、とりわけディオゲネス以降のキュニコス派と考えるのが妥当であろう。そしてここでアリストテレスもまた、先のソクラテスと同様に、それに否定的な立場をとっているのである。この証言5は、アリストテレス自身の「中間（メソン）」としての徳を以下のように説明した後に述べられたものである。

証言 6

「過剰な運動も運動の不足も身体の強さを損なうし、同様に食べすぎや飲み過ぎも、逆に飲食の不足も健康を損なうのであって、節度ある（シュンメトロン）量が健康を作り出し、増進し、保全するのである。そして、これと同じことが、節制や勇氣、その他の徳の場合についても言えるのである。なぜなら、あらゆることを避け、恐れ、何にも耐えることをしないような人は臆病になり、逆に、恐れるということがまったくなく、あらゆることに立ち向かっていくような人は向こう見ずになるからである。同様に、あらゆる快楽に耽り何ひとつ快楽を差し控えようとししない人は放埒な人になり、他方、あらゆる快楽を避ける人は、野暮な人たちがそうであるように、一種の無感覚（アナイステートス）になる。したがって、節制と勇氣は超過と不足によって減ばされ、中間（メソン）によって保全されるのである」アリストテレス『ニコマコス倫理学』1104a15-27

アリストテレスは「中間」を性格の徳とみなす一方、「超過」と「不足」を両極にある悪徳とみなす。そしてここでは、中間としての徳を減ぼす「不足」として「無感覚」を批判しているのである。しかしながら、先の証言 5 で見られたように、感情のない状態が無条件に否定されるわけではない。「そうした状態になるべき仕方とそうでない仕方、なるべき時とそうでないとき、あるいはその他、付け加えられるべき同様の限定条件」を考慮に入れることの重要性をアリストテレスは語っているのであり、この証言 6 も同様に理解すべきであろう。そして「節度ある（シュンメトロン）」状態、「中間（メソン）」としての徳を、「感情（パトス）」の問題としてアリストテレスは次のように語る。

証言 7

「性格の徳とは、感情（パトス）と行為にかかわるものであるが、感情や行為には超過と不足、中間ということが認められるからである。たとえば、恐れること、自信のあること、欲すること、怒ること、憐れむこと、一般に快楽を覚えたり（ヘードマイ）、苦痛を感じたりすること（リュペオー）には、多すぎることや少なすぎるものが認められるのであって、どちらの場合もよくないのである。けれども、しかるべき時に、しかるべきものについて、しかるべき人たちに対して、しかるべきことのために、しかるべき仕方ですこうした感情を感じることは、中間の（メソン）最善の状態によるのであり、これこそまさに徳に固有のことなのである。同様にまた、行為に関しても超過と不足、中間がみられるのである」アリストテレス『ニコマコス倫理学』1106b16-24

そしてアリストテレスがここでいう「しかるべき感情」とは、「正しい理性（ロゴス）の指示する通りに」⁽⁵⁾ 受け取られるものである。アリストテレスは、そのような感情の「節度（シュンメトロン）」を主張しつつ、「感情の

ない状態（アパテイア）」を全面的に否定しているのではないことに注意しておきたい。

1-4 初期ストア派

では、少し回り道をしたが、ここでストア派の立場をはっきりさせておこう。キュニコス派に関する断片が極めて少ないのに対して、ストア派に関しては多くの断片が残されている。とはいえ、初期ストア派と呼ばれる人物、すなわち、ゼノン（335-263）、クレアンテス（331-232）、クリュシッポス（280-207）たちの著作それ自体が現存しているわけではなく、それらの断片、あるいはそれらへの言及をもとに、彼らの思想を確かめねばならない⁽⁶⁾。まずストア派の全体的な立場を確認しておこう。

ストア派の人たちは、まず人生の目的を以下のように述べる。

証言 8

「ゼノンが最初に、『人間の自然本性について』の中で、目的は「自然に従って生きることである」と言ったのであるが、そのことは「徳に従って生きること」に他ならなかったのである。なぜなら、自然はわたしたちを導いて徳へと向かわせるからである」DL.6.87

そして「自然に従って生きること」は「徳に従って生きること」であると同時に、さらにそれは「ロゴス」が命じることに従って行為することでもある。

証言 9

「自然に一致して生きることとは、各人が自分自身の自然にも、また宇宙

万有の自然にも従っているということであり、そしてその場合には、共通の法、万物に普く行き渡っている正しいロゴスが禁じることは何ひとつ行わないということである」DL.7.87

ストア派にとってロゴスとは、自然を支配している「ことわり」であり、それを把握する「理性」であり、またそれを表現する「言葉」でもある。自然を正しく認識することによって、わたしたちの善悪が認識され、わたしたちの行為が決定されるのである。

証言 10

「クリュシッポスは『自然に関する諸問題』において、「善と悪についての理論、また徳や幸福についての理論を立てるためには、普遍的な自然や世界の秩序からアプローチする以外に、より相応しい方法はなく、そもそもそれ以外に方法はない」と主張している。さらにその後で、「というのは、善と悪についての理論はそれらに結びつけられねばならない、その理由は、善と悪を考えるにあたって、それらよりも良い出発点や参照は他にないからであり、また自然の観察は、善と悪を区別すること以外のために為されるべきではないからである」と述べている」プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1035c-d

「自然についての観察は、善と悪を区別するため」になされるとストア派は明確に言う。その「自然の観察」にとってまず出発点となるのが、事物から得られる「表象」である。その表象に「同意」を与えることによって事物が正しく「把握」され、さらに「知識」として定着する。そしてそれを言葉で表明するのがストア派の論理学である。このように、ストア派の哲学は、善悪の問題を議論する倫理学と、自然を正しく認識する自然学と、その認識の方法を示す論理学とが密接に関連しあっている。

では、そのような体系の中で、「感情のない状態（アパテイア）」はどのように説明されるのか。先に述べたように、それをタイトルにした書はシノペのディオゲネスに伝えられるのみである。後にキケロ（前 106- 前 43）は、「クリュシッポスとストア派の人たちは、感情について論じるとき、大部分をその分類と定義に費やし、魂の癒し方、惑乱の防ぎ方については、ほんのわずかな説明しかしていない」⁽⁷⁾ と語ることになるのだが、そのことを裏付けるように、『感情（パトス）について』という著作は、多くのストア派の人たちによって書かれた⁽⁸⁾。それらをもとに、「感情（パトス）」の説明から見ることになろう。

証言 11

「ゼノンによると、感情（パトス）とは、非理性的で、自然に反した魂の動き、ないしは過剰な衝動である」 DL.7.110

「感情」は「非理性的」で「自然に反する（*παρὰ φύσιν*）」と述べられ、先に示された「自然に従って生きる」ことのまさに対極にある。では、それはどのようにして生じるのか。この証言に先立つ部分は以下である。

証言 12

「虚偽（プセウドス）から思考の上に歪みが生じ、そしてその思考上の歪みから数多くの感情が芽生えて、それらが不安動揺（アカタスタシア）の原因となる」 DL.7.110

「感情（パトス）」が生じる原因が「虚偽（プセウドス）」であると明確に述べられている。つまり、わたしたちの自然についての判断、さらには、それに関する善悪の判断における「虚偽」こそが「感情」の源なのである。そ

のことは、「感情は判断である」として、以下のように述べられることもある。

証言 13

「クリュシッポスが『感情について』の中で述べているように、ストア派は、感情は判断（クリシス）であると考えている。というのも、金銭欲という感情は、お金は善いものであると思いなすこと（ヒュポレープシス）であり、酒浸りや放縦などの場合に見られる感情も同じように理解されるからである」DL.7.111

すでにゼノンと後のクリュシッポスとの間で、感情と判断の関係において、感情は判断によって生じるものなのか、それとも判断そのものなのかという、考え方の違いがあったようである⁽⁹⁾。そのことについては、第3章でとりあげることにする。

ストア派は、わたしたちの「不安動揺」の原因である「感情」を大きく次のように四つに分けて説明する。

証言 14

「さまざまな感情のうちで〔類として〕最上位にあるのは、ヘカトンが『感情について』第二巻のなかで、またゼノンも『感情について』のなかで述べているところによれば、苦痛（リュペー）、恐怖（ボボス）、欲望（エビテューミアー）、快楽（ヘードネー）という四つの類である」DL.7.111

紀元前二世紀に活躍したとされる、中期ストア派のヘカトンの著作も言及されている。ただここでは、ゼノンとの共通性が示されていると理解しておけばいいだろう。そして彼らは、これらの情念に属する実に多くの感情につ

いて、それぞれ細かく定義をする。後に考察する「怒り（オルゲー）」は、欲望に属し、「不当な仕方でも不正を加えたと思われる人への復讐の欲望」（DL.7.114）と定義されている。では、それらの感情を取り除くにはどうすればいいのか。それについて後にキケロは「ほんのわずかな説明しかしていない」と述べることになるのだから、その理由ははっきりしている。その方法がさわめて単純な話だからである。すなわち、「感情のない状態（アパテイア）」に至るためには、自然についての、また善悪についての「虚偽」の代わりに「真理」が、「誤った思いなし（ヒュポレープシス）」の代わりに「把握（カタレープシス）」、さらには「知識（エピステーメー）」があれば済むのである。つまり、以下に言われるように、「知者」であることが必要とされるのである。

証言 15

「彼ら〔ストア派〕の主張では、知者は感情のない者（アパテース）である。なぜなら、知者は情念に陥ることがないからである」DL.7.117

第2章 「感情のない状態（アパテイア）」概念への批判

では続いて、「感情のない状態（アパテイア）」という概念に対する批判を見ていくことにしよう。すでに第1章の考察で、ソクラテスとアリストテレスによって「感情のない状態（アパテイア）」は否定的に言及されていた。まず証言4において、ソクラテスは「節度を保つこと」との対比で、「何ひとつ悲しまない」あり方を「ありえないこと」と見なしていた。そしてアリストテレスは、証言6において、徳である中間としての「節度」を語るとともに、悪徳の一方の極致である「不足」として「一種の無感覚」を批判していたのである。また、アリストテレスは証言5で、「感情のない状態（アパテイア）」を徳と定義した人たちに対しては、その主張が「無条件に」なさ

れていることを問題視していた。つまりアリストテレスは、「しかるべき」感情が存在することを認めていたのである。以上のことから、これから取り上げるヘレニズム期の論争を取り上げる前に、すでに「感情のない状態（アパテイア）」に対する批判として、二つの論点があることを指摘しておくことは有用であろう。すなわち、

論点1 「感情のない状態（アパテイア）」は不可能である。

論点2 必要な「感情（パトス）」が存在する。

の二点である。

さて、ヘレニズム期において、ストア派の論敵となるのは、いま挙げた二人の人物を祖とする学派である。一つは、ソクラテスの弟子プラトンによって創設された学園アカデメイアに属する人たち、すなわち「古アカデメイア派」であり、さらにそれに続く中期プラトン主義者たちである。もう一つは、アリストテレスが創設した学派の人たち、すなわち「ペリパトス派」である⁽¹⁰⁾。時にそれら二つは交じり合う様相を示す。それぞれの立場からどのような主張が展開されたのか、いま示した論点と照らし合わせながら、順番に見ていくことにしよう。

2-1. 古アカデメイア派

まず、プラトンの学園アカデメイアにおいて活躍したクラントル（c.335-275）に関する証言を取り上げたい。その人物は、学園アカデメイアの第三代学頭クセノクラテスと、第四代学頭ポレモンに学び、『悲しみについて』という本を書いたと伝えられる。キケロは、次のようにクラントルの主張を説明している。

証言 16

ヘレニズム時代における「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる論争

「かつてわたしたちのアカデメイアで学び、俊英として誉れ高かったクラントルはが次のように言ったのはあながち間違いではない。すなわち、「わたしは大きな声で苦痛のない状態（インドレンティア）を称賛する人たちにはけっして同意できない。そのようなものは、そもそも存在しえないし、また存在すべきでもない。もちろん、わたしとしても、苦痛がないように願っている。しかし、もし苦痛に襲われるときには、たとえ身体が切り刻まれようとも、それを感じる感覚が保たれていることを望む。苦痛をまったく感じないことは、魂の愚鈍と身体のみひという大きな代償なくしては獲得しえないものだからだ」と」 Tusc.3.12

ここでは「苦痛」という特定の感情をもとに議論がなされているが、時代を考えると、ストア派の「感情のない状態（アパテイア）」が念頭に置かれた発言と考えていいだろう⁽¹¹⁾。注目すべき箇所は、「存在しえないし、存在すべきでもない」というクラントルの言葉である。「存在しえない」という言葉から、論点1が示されていることは明らかである。では「存在すべきでもない」とはどのようなことであろう。キケロは、別の著作の中で、クラントルが、より広く感情について、以下のように論じていたと言う。

証言 17

「この学派〔古アカデメイア派〕は中間（メディオクリタース）を尊ぶ人たちで、どんな感情にも自然な節度（modus）というものがあるという考えである。わたしたちはみんな、古アカデメイア派のクラントルの『悲しみについて』という本を読んでいる。・・・そして古アカデメイア派は、感情というものは実際の必要性があつて自然によって人間の心に与えられたものだと言っている。恐怖（metus）は用心するためであり、哀れみと

悲しみは慈悲のために、怒り（*iracundia*）は決断力を磨くためにあるのだと言っていた」キケロ『ルクルス』135

ここでは「苦痛」だけではなく、「恐怖」「哀れみ」「悲しみ」、さらには「怒り」といった多くの感情が取り上げられている。そして、そのいずれに対しても、クラントルは、節度（*modus*）を認め、さらにはそれらの「必要性（*utiliter*）」を主張しているのである⁽¹²⁾。したがって、先の「存在すべきでもない」という言葉は、この必要性ゆえにその感情を取り除くべきではない、と理解すべきであろう。つまり、論点2が示されているのである。

そして、古アカデメイア派クラントルに関する証言は、キケロ以外にも、擬プルタルコスによっても伝えられている。

証言 18

「それゆえ、それ〔悲しみが節度を失うこと〕もまた、有害で劣悪であり、誠実な人間にはけっしてふさわしくないものとして捨て去らねばなりません。けれども、**節度ある感情**（メトリオパテイア）は拒絶すべきではないのです。アカデメイア派のクラントルは、「わたしたちは病気にならないようにしよう。もっとも、病人にも何らかの感覚は生じるであろう、わたしたちの身体の一部が切り取られるにせよ、引き裂かれるにせよ」と述べています。すなわち、痛みを感じないなどということは、大きな代償を支払わなくては人間に生じないのです」擬プルタルコス『アポロニウスへの慰めの手紙』102D

ここでは、「節度ある感情（メトリオパテイア）」という言葉をともなって、クラントルの思想が語られているのである。擬プルタルコスの年代は紀元後二世紀と推定されており⁽¹³⁾、それが、上記に続く次の証言に見られるように、「感情のない状態（アパテイア）」と対比されているのである。

証言 19

「それゆえ理性・議論（ロゴス）は、思慮ある人がそのような不幸に対して、感情のない人間（アパテース）ではないことを求めているのであり、また過剰に感じる人間ではないことを求めているのです。感情のない人は冷酷で獣的であり、過剰に感じる人はだらしくめめしいからです」擬ブルタルコス『アポロニウスへの慰めの手紙』102E

2-2 中期プラトン主義

では続いて、古アカデメイア派からの延長線上に位置する、中期プラトン主義者の主張を取り上げることにしよう。紀元後二世紀に生きたアルキノオスにおいて⁽¹⁴⁾、「感情のない状態」と「節度ある感情」がよりはっきりと次のように対比されている。

証言 20

「また同じように、両親が死んでも悲しまないものは「感情のない人（アパテース）」であり、悲嘆のあまり気を失うほど悲しむ者は「感情が過度な人（ヒュベルパテース）」であり、「節度ない人（アメトリオパテース）」である。そして、悲しみはするけれども節度とともにその感情をもつ人が、「感情が度になっている人（メトリオパテース）」である」アルキノオス『プラトン哲学の概要』30.5

アルキノオスは、「悲しみ」という感情をもとに、三つのあり方を「感情のない人」「感情が過度な人」「節度ある感情の人」に区別している。さらにアルキノオスは続けて、「感情において節度あること（τὸ μὲν μέτριον ἐν τοῖς πάθεσι）が最善である」（30.5）と述べ、それを「中間の徳」と見なすのであ

る。

まずここで語られている「感情のない人」の説明は、ソクラテスに関する先の証言4と同じと考えていいだろう。その点で、ソクラテス、プラトンの思想の延長線上にあると言える。だが、明らかに、アリストテレスの徳についての考え方が大きく混入している。そういった点で中期プラトン主義は「折衷主義」と言われることがある。だが指摘されるように⁽¹⁵⁾、単なる混ぜ合わせではなく、自分たちの立場をアリストテレスの概念をも利用しながら説明していると考えていいだろう。

そして、アルキノオスは、感情を次のように分類し、「節度ある感情」がどのような感情において成立するかを説明する。

証言 21

「様々な感情のうち、あるものは荒々しく、あるものは穏やかである。そして穏やかな感情は、自然本性にそくして人間にとって必要で本来的なものであるかぎりの感情である。また、それらの感情が穏やかなものであるのは、それらが節度になかったもの（シュンメトロン）であるかぎりであって、度外れということがそれらに付け加わると、誤ったものになる。その感情とは、快楽、苦痛、怒り（テューモス）、憐れみ、羞恥である。なぜなら、自然本性に即したものに対して快を覚え、それと反対のものの中にあって苦痛を感じるのは、本来的なことだからである。また、怒り（テューモス）は身を守り、敵に報いるために必要であり、憐れみは人を思いやる心に固有のものであり、羞恥は醜い事柄から身を遠ざけるのに適している。他方、それ以外の荒々しい感情は、自然本性に反した感情であり、歪みや悪しき習慣から生じる。それらは、嘲りや他人の不幸を喜ぶことや人間嫌いであり、これらの感情は、たとえ強められようと、たとえ弱められようと、どのようなあり方をしようと、まさにまったく誤ったものであって、節度をもつ（メトリオテース）ということを受け入れることは

古アカデメイア派のクラントルの証言 17 に、「実際の必要性があって自然によって人間の心に与えられた」という表現があったが、アルキノオスはここで「自然本性にそくして人間にとって必要で本来的なものである（ἀναγκαῖά τε καὶ οἰκεῖα）かぎりの感情」という言い方をしている。ここに論点 2 を明確に読み取ることができるだろう。アルキノオスは、その言葉とともに、感情を「自然本性にそくしたもの（κατὰ φύσιν）」と「自然本性に反したもの（παρὰ φύσιν）」とに区別する。前者が「穏やかな感情」、後者が「荒々しい感情」と呼ばれる。そのうち後者は「嘲り」「他人の不幸を喜ぶこと」「人間嫌い」といった例があげられ、「たとえ強められようと、弱められようと、どのようなあり方をしようと、まさにまったく誤ったものであって、節度をもつ（メトリオース）ということを受け入れることはない」と言われるのである。したがって、そういった感情には、「アパテース」であることが必要となる。他方、前者の「自然本性にそくした感情」もまた、だからといっていかなるあり方も認められるわけではない。アルキノオスはそれを「それらの感情が穏やかなものであるのは、それらが度になったものであるかぎりであって、度外れということがそれらに付け加わると、誤ったものになる」と述べているのである。ここに「節度ある感情」が成立する。

つまり、アルキノオスの感情の分類にそくして、「アパテイア」と「メトリオパテイア」を説明すると、「自然本性に反した感情」に関しては「感情のない状態」が求められ、「自然本性にそくした感情」に関して「節度ある感情」が成立することになるのである。それは、穏やかさが保たれ、「人間にとって必要で本来的な」感情なのである。アリストテレスは証言 5 において、「アパテイア」それ自体を否定するのではなく、それが「無条件に」語られている点を批判していたが、その主張と重なるだろう。

2-3 プルタルコス

さてここで、年代的には少し前に戻ることになるが、同じく中期プラトン主義者の一人プルタルコス（後 46 頃 -120 以降）の著作『性格の徳について』を取り上げることにする。その書では、タイトルが示している通り、アリストテレスの立場がはっきり肯定的に示されている。証言 7 で取り上げたアリストテレスの「性格の徳」を、プルタルコスは次のように説明する。

証言 22

「理性は、感情をすべて消し去ることを望んでいるのではなく（そのようなことは可能でも、得策でもないのだから）、ただ、ある限度と秩序を感情に付け加え、性格の徳をそこに植え付ける。それは、感情のない状態ではなく、感情の節度（シュンメトロン）であり中間（メソテース）なのである」プルタルコス『性格の徳について』443C-D

ここでは、理性によって「感情をすべて消し去ること」を主張するストア派の立場を、「可能でも得策でもない（οὔτε γὰρ δυνατόν οὔτ' ἄμεινον）」と批判し、その対比として「性格の徳」をプルタルコスは語る。その「性格の徳」が「感情のない状態ではなく、感情の節度であり中間」と説明されているのである。そして理性によって「限度の秩序を感情に付け加える」というこの考え方に、アリストテレスはプラトンの「魂に関する諸原理を最大限に利用している」（442B）とプルタルコスは指摘する。その「諸原理」とは、魂を理性的部分と欲求の部分に区別し、両者の働きの拮抗において人間の感情や行為を説明することを指す。プルタルコスは、他方、ストア派は魂を一元的に理解していると言う⁽¹⁶⁾。魂の「主導的部分」は、完全に理性的になるか、あるいは完全に感情に支配されるかのいずれかであり、そこに両者の共存はないと考えるのである。そのことをプルタルコスは次のように述べる。

証言 23

ヘレニズム時代における「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる論争

「彼ら〔ストア派〕はすべて共通に、徳を魂の主導的部分の、ロゴスによって生じた、ある種の性状、能力であると、いやむしろ、徳がそのまま首尾一貫した、確固たる、変わることのない理性（ロゴス）であると措定している。彼らはまた、魂の受動的で非理性的な部分が、何らかの差異や自然本性によって理性的部分から区別されてあるとは考えず、魂の同じ部分が、それを彼らは思考とか主導的部分と呼ぶのだが、全体として、さまざまな感情（パトス）や、様態や性状における変化の点で、変転し変化して、悪徳になったり徳になったりするるのである」プルタルコス『性格の徳について』441C

つまり、「理性的部分」と「受動的で非理性的部分」が「自然本性」として別に存在するのではなく、魂の同一の部分が「全体として」理性に、あるいは感情に変化をする、と考えるのがストア派の立場なのである⁽¹⁷⁾。その同一の部分をストア派は「主導的部分」と呼ぶ。それは「魂の最上位の部分」であり、それが表象や同意や感覚を作り出す⁽¹⁸⁾と説明される。そうであると、ストア派の考える徳、すなわち「理性」の命令に従って生きることは、その部分から「感情をすべて消し去る」ことによってしか成立しなくなる。アリストテレスの「性格の徳」は、そのような主張に対する批判となるのである。

最後に、そういったアリストテレスの立場をはっきりと受け継ぐ、紀元後2世紀前半に活躍したとされる⁽¹⁹⁾、ペリパトス派のアスパシオスの主張を挙げておこう。そこでは、魂の部分という考え方が示されるとともに、感情を区別することによって「ふさわしい感情」が存在することが述べられている。

証言 24

「ストア派の人たちは、感情（パトス）とは激しい衝動、あるいは非理性的な衝動であると考えた。しかし、それが正しいことわりに反するものであるということをよく理解していなかった。というのは、すべての感情が激しいものであるのではなく、また理性に反しているのでもない、むしろある感情は善き人にふさわしいのである。とにかく、説得を聞き入れず頑固な人たちに関して、わたしたちは彼らの性格を非難する。さらにまた、魂の欲求的部分を言うことを聞かないものとして完全に取り去ることはできないし、むしろ理性をもつ部分のように整えること（κοσμήσαι）はできる。それが整えられるのは、感情の節度ある状態（シュンメトリア）においてである」アスパシオス『アリストテレス「ニコマコス倫理学」注解』44.12-19

第3章 「節度ある感情（メトリオパテイア）」概念への批判

前章では、「感情のない状態（アパテイア）」が二つの論点から批判され、それに代わるものとして「節度ある感情（メトリオパテイア）」というあり方が肯定されていることを見た。では続いて、ヘレニズム時代において、アパテイアを擁護する立場からなされた主張を取り上げることになろう。ここでは、先ほどとは反対に、「節度ある感情（メトリオパテイア）」という立場が批判されることになる。

3-1 キケロ

まず、キケロ自身の哲学的立場について少し説明しておこう。キケロは、自身をアカデメイアの流れに位置づけ、しかもアルケシラオスに始まる懐疑主義の立場をとる⁽²⁰⁾。それは、真理ではなく「真に近いもの」を探求する

立場であり、また論敵からの批判を積極的に受け入れることをよしとする。先に取り上げたように、ストア派に対しても批判的な見解を述べることもある。そして、そのような「温和な懐疑主義」という立場から、感情論に関しては、「現時点でもっとも真に近い考え」（Tusc.5.82）として、ストア派の主張を擁護するのである。

では、そのようなキケロが感情について議論している『トゥスクルム荘対談集』の第四巻を考察することにしよう。第四巻の主題は、「いかにすれば感情（*perturbatio*）⁽²¹⁾から自由になれるか」である。そこでは、「感情のない状態」を主張するストア派と「節度ある感情」を主張するペリパトス派との対立が明確に述べられている⁽²²⁾。

証言 25

「[1] 知者は、あらゆる方向に視線を送り、労苦や心配のない居場所がどこであるかを知っている。それゆえ、運命がどんな災難を運んできても、適切かつ平静に耐えることができる。これができるものは、苦悩のみならず、他のすべての感情からも無縁でいられる。これらのものと無縁の魂は、人を完璧で絶対的な幸福の状態におく。一方、[2] 興奮した魂、完全で確かな理性から切り離された魂は、節操（*constantia*）のみならず、健康をも失ってしまう。それゆえ、[3] 魂が混乱をきたすのは必然であると主張するとともに、超えるべきでない境界（*modus*）を定めようとするペリパトス派の考え方、言い方は、不十分で弱いとみなさなければならない」
Tusc.4.38

[1] で説明されているのはストア派の立場であり、「すべての感情から無縁」である知者が幸福であるとみなす。[2] はそれと反対の悪徳にある状態が述べられており、この点に関してはストア派、ペリパトス派に共有された考え方である。そしてキケロは、[1] の立場から、[2] を認めながら、「境

界を定めること」で、感情に対処しようとするペリパトス派の立場〔3〕を「不十分で弱い」と批判しているのである。では「不十分で弱い」とは、どのようなことを意味するのであろう。そのペリパトス派の立場は次のようにも説明される。

証言 26

「彼ら〔ペリパトス派〕の議論は、つまるところ、こうした感情は刈り込むべきものであって、根本から掘り起こすことはできないし、またそうすべきでもない、というものである。そして、ほとんどすべての場合において、中間（*mediocritas*）が最上であるとみなしている」 Tusc.4.46

ここで論じられているペリパトス派のあり方については、指摘されるように⁽²³⁾、アリストテレスの語る「中間」とはやや異なる。というのも、アリストテレスが証言7で語った「しかるべき時に、しかるべきものについて、しかるべき人たちに対して、しかるべきことのために、しかるべき仕方で行った感情を感じる」としての「中間」は、けっして「境界」や「程度」の問題ではなかったからである。ただ、アリストテレスがその「しかるべき仕方で行った」という事態を、証言6で運動量や飲食の量に例えて説明していたように、そこに「境界」や「程度」を読み取ることも可能であろう。そしてその「境界を定めること」が不可能であるとして、キケロは次のように言う。

証言 27

「ひとたび理性から逸脱すれば、感情は自らを駆り立てていくしかない。・・・したがって、ペリパトス派がいかに節度ある感情（*moderatas perturbations*）、節度ある不正、節度ある怠惰、節度ある放縦といっても、何の意味もない」 Tusc.4.42

つまり、キケロは感情に「境界を定めること」はありえず、そのことによって可能となる「中間」が成立することも認めないのである。証言 25 の三つの区分で言うと、感情への対処は [1] か [2] しかありえないことになる。そしてここでの証言の「節度ある不正、節度ある怠惰、節度ある放縱」という表現は皮肉に満ちたものであり、ペリパトス派の立場を「悪しきものと悪しきものとの中間」(Tusc.4.57) とさえ言う。それらはすべて「理性からの逸脱」に他ならない。すると先に言われた「不十分で弱い」という表現も、実質的には「不可能である」と述べているのに等しい。先ほどの論点 1 「感情のない状態（アパテイア）は不可能である」に対して、ストア派は、「節度ある感情（メトリオパテイア）こそ不可能である」と言い返しているのである。

では、論点 2、すなわち、感情に有用性を認め、自然本性にかなっているものもあるという主張に対して、キケロはどのように反論するのであろうか。証言 21 では、「自然にそくした感情」として「怒り（テューモス）は身を守り、敵に報いるために必要であり、憐れみは人を思いやる心に固有のものであり、羞恥は醜い事柄から身を遠ざけるのに適している」と言われていた。

まず原則として、感情がすべて非理性的なものとされる以上、それが「自然本性にかなっている」ことはありえない (Tusc.4.79)。なぜなら、キケロにとって、人間の自然本性は理性に他ならないからである。そしてキケロは、有用性に関しても、本来の原則論を述べる。たとえば戦いにおける「怒り (iracundia)」の有用性については、むしろ必要なのは「冷静さ」(Tusc.4.48) や「落ち着き」(Tusc.4.50) であり、「勇気」という徳が本来はたらくべきであるという。「怒り (ira)」⁽²⁴⁾ は「復讐への欲望 (ulciscendi libido)」(Tusc.4.44) と定義され「もっとも狂気に近いもの」(4.52) であり、「まったく価値のないもの」(Tusc.4.50) とされる。さらにクリュシッポスの名前を引き合いに出しながら、「勇気とは物事に耐える知識である」(Tusc.4.53) と述べ、「怒りよりもおぞましい悪徳はない」(Tusc.4.54) と断じるのである。それらを踏まえて、キケロは以下のように言う。

証言 28

「ペリパトス派は、「過剰なものは刈り込まねばならぬ、自然なものは残さねばならぬ、と言うが、過剰になりうるものが果たして自然なものと言えるのだろうか。そのような過剰は迷妄の根から生じてくるのであり、芽を摘んだり、枝を刈ったりするのではなく、根こそぎ引き抜かねばならない」

Tusc.4.57

有用なのは「感情」ではなく、理性であり、徳なのである。そしてそれは「知識」なのである。この立場はストア派において貫かれている。

3-2 セネカ

続いて、「怒り」という感情をもとに、同様の議論を展開しているセネカ（前1年頃 -65）の主張を取り上げたい。セネカは「節度ある感情」を批判するとともに、「感情」の成立と「感情を消し去ること」について、より詳細に説明している。

セネカは「感情（*adfectus*）とは、心の不適切で突発した動きであり、それが繰り返されるのを放っておくと、病気をもたらす」⁽²⁵⁾と定義するのであるが、『怒りについて』においては、感情の中でも「とりわけおぞましく凶暴なもの」(*Ira*.1.1.1)として「怒り（*ira*）」を議論している。そしてやはり「怒りは、理性に敵対するとはいえ、理性がある場所以外、けっしてどこにも生じない」(1.3.4)と述べ、感情は理性と同じ魂の部分に生じるとする。セネカは、感情の成立について、またいったん成立するとそこから逃れるのが困難であることについて次のように述べる。

証言 29

ヘレニズム時代における「感情のない状態（アパテイア）」をめぐる論争

「道をそれ始めると、それを健全な状態にするのは困難である。なぜなら、[a] ひとたび感情が侵入し、[b] それにわたしたちの意志によって（*uoluntate nostra*）わずかでも権限が与えられた場所には、[c] 理性はいっさい存在しないからである。それ以降、[d] 感情は、許されるかぎりでなく、欲するかぎりを行なうであろう」 *Ira.1.8.1*

セネカも同様に、魂の主導的部分の全体が変化するという立場をとるため、[a]「ひとたび感情が侵入する（*adfectus inductus est*）」と [c]「その場所には理性はいっさい存在しない（*nihil rationis est*）」ことになる。その後は、もはや「感情は欲するかぎりを行う」ことになる。それゆえ、セネカもまた、「あらゆる感情から自由であること（*omni perturbatione liber*）」（*Ira.1.19.8*）が必要であると主張するのである。

だがここでは、[a] と [c] をもたらすことになる、[b]「感情にわたしたちの意志によって権限が与えられる（*iusque illi aliquod uoluntatenostra datum est*）」という言葉にも注目しよう。つまり、感情の侵入に際して、わたしたちの「意志」が関与している、という点である。セネカにとって、そもそも感情は「対象から差し出された表象にそくして動かされること（*ad oblatas rerum species moueri*）」（*Ira.2.3.1*）ではなく、むしろ「そうしたことに身をゆだねること（*permittere se illis*）」（*Ira.2.3.1*）であり、能動的な要素を含むのである。そしてそのことは、キケロにおいても、「すべての感情は判断と意志による（*ex iudiciis opinionum et voluntatibus*）導きがある」（*Tusc.4.82*）と述べられており、さらには、本論で取り上げた「感情は判断である」というクリュシッポスの証言 13 までさかのぼることができる。クリュシッポスのその言葉は、意志による能動性を強調したものと解釈することができるだろう。では、ここで言われている「権限が与えられる」とは、どういうことなのか。セネカは「怒り」の感情の成立を次のように段階的に説明している。

証言 30

「[i] 不正の表象が引き起こした、あの最初の心の興奮は、怒りではない。怒りが不正の表象そのものでないのと同様である。[ii] 後に続いて起きる、あの衝動、不正の表象を受け取ったのみならず、同意を与えた (adprobauit) 衝動、意志と判断によって (uoluntate et iudicio) 復讐へと突き進んでいく衝動こそが怒りである」 Ira.2.3.5

ここでは、先の [b] の局面が [i] と [ii] の二段階に区別されている。感情は、単なる受動的な段階にとどまる「表象」とは区別され、表象への「同意」として、さらにそれによる「衝動」として説明されているのである。この点では、先に見たゼノンの証言 11 と重なる。そしてセネカによつては、表象は「感情の準備段階のようなもの (quasi praeparatio adfectus)」(Ira.2.4.1) とも言われる⁽²⁶⁾。それへの「同意」が「感情」であり、先の [b] で言われていた「権限が与えられた」という表現は、「意志と判断」によるこの「同意」とみなしていいだろう。その同意の主体は「魂の主導的部分」である。したがってここでも、理性と感情は対立しあうのではなく、いったん同意をすれば「全体として」その部分を感情が占領することになる。先の [c] で言われていたように、「理性はいっさい存在しない」のである。「怒り」が「復讐」へと連続していくことを、セネカは次のように語る。

証言 31

「何かを把握した、憤慨した、断罪した、復讐する。これらは、次々に接触してくる事柄に対して、魂が同意したという事態なくしてありえない」
Ira.2.1.4

もちろん最初に成立する「同意」の後に続くすべての「同意」は、全体が

感情によって占められている「主導的部分」によるものである。その同意を拒む理性は「まったく存在していない」のだから、当然のことながら「節度」や「限度」は存在しないことになる。それが先の[d]で言われていた「感情が欲するかぎりを行う」という事態であろう。セネカは書簡において、次のように説明している。

証言 32

「ひとたび理性の意に反して起こり始めると、理性に反したままずっと持続するだろう。実際、感情のはじまりを抑圧する方が、その勢いが強くなってから制御するよりも容易だ。だから、あのような〔ペリパトス派の〕中間説は、偽りであり無益だ。それはちょうど、ほどほどに狂うべきだとか、ほどほどに病気になるべきだと言うのと同じ言い分だと考えねばならない。程のよさを保つのはただ徳のみであって、魂の諸々の悪はそれを受け入れない。・・・感情にもまた節度などない。人は感情から悪徳へと移行するのだから」セネカ『書簡集』85.9-11

したがって、セネカが言う「あらゆる感情から自由であること」(Ira.1.19.8)は、感情が成立する一番最初の「同意」を回避することによってしか可能とされない。そしてセネカは「判断によって生じる運動は、判断によって取り除かれる」(Ira.2.4.2)と言う。このことは、これまで繰り返し見てきたように、「誤った判断（ヒュボレープシス）の代わりに「把握（カタレープシス）」、さらには「知識（エピステーメー）」という、ストア派に一貫した立場である。そうだとすると、感情への正しい対処は、自然についての正しい知識という問題に、すなわち認識の問題に帰することになるのである。

最後に、論点の確認をしておこう。「アパテイアは不可能である」という論点1に対しては、むしろ「メトリオパテイアは不可能である」という反論であった。この反論の応酬は、おそらくそれぞれの魂についての考え方の相

違に起因すると思われる。魂を大きく「理性的部分」と「非理性（欲求）的部分」に区別し、理性による非理性的なものを制御するという立場からすると、完全に「非理性的部分」がなくなるという事態は、身体の麻痺にたとえられたように、人間的な生活を不可能にするものであるだろう。他方、魂の「主導的部分」が全体として理性か感情のいずれかによって占められる、という立場からすると、それらの中間的なありかたは原理的に不可能となるのである。また、必要な感情、有用な感情があるかどうか、という論点2についても、いま述べた魂観によってそれぞれの主張を説明することができるだろう。ストア派にとって、必要な感情などは存在しえないのである。

さて、以上のような両立場による論争は、当然のことながら、一つの同意や決着が得られたわけではない。まず、論点1に関して、ストア派は「メトリオパティアこそ不可能である」と言い返したのであるが、論敵はそれを受けても、「アパティアは不可能である」という主張を退けはしなかった。それどころか、ストア派自身が、理性か感情か、徳か悪徳かという二分法で語る「知者」の厳格なあり方については、その困難さを認めることになるのである。すでに、クリュシッポス自身が『正義について』のいう著作で、知者のあり方が「人間の本性を超えていると思われるだろう」⁽²⁷⁾と述べていた。そしてヘレニズム時代において、もっとも有名なのは、やはりセネカの、知者に関する次の証言であろう⁽²⁸⁾。

証言 33

「そのような第一級の人材は、フェニックスのように、五百年に一度しか生まれない」『道徳書簡集』42.21

第4章 「よい感情（エウパテイア）」概念をめぐる

では、ストア派は、単なる理想のみを語っていたのであろうか。けっして

そうではない。その点について、ストア派が語る「よい感情（エウパテイア）」という概念を手掛かりに考察を続けていくことにしよう。その概念は、初期ストア派によって語られたものと考えられるが⁽²⁹⁾、それがヘレニズム期の論争において取り上げられることになり、「節度ある感情（メトリオパテイア）」との奇妙な接点が見いだされることになるのである。

4-1. 初期ストア派

ディオゲネス・ラエルティオスによると、初期ストア派の人たちは「よい感情（エウパテイア）」を次のように語っていた。

証言 34

「しかしながら、彼らの主張するところでは、三つの「よい感情（エウパテイア）」もあるのであって、「喜び（カラ）」と「用心深さ（エウラベシア）」と「願望（プーレーシス）」とがそれである。そして喜びとは、快楽（ヘードネー）とは反対のものであって、理にかなった（エウロゴン）高揚のことである。また用心深さとは、恐怖（ポボス）とは反対のものであって、理にかなった（エウロゴン）忌避のことである。というのも、知者は決して恐怖心を抱くことはないであろうが、しかし用心深くはするだろうからである。さらに、願望とは、理にかなった（エウロゴン）欲求のことであるから、欲望（エピテューミア）とは反対のものであると彼らは言っている」DL.7.116

ここで挙げられている「三つのエウパテイア」は、すでに第1章の証言13で分類されていた感情とそれぞれ「反対」の関係にあり、その特徴は「理にかなっている（εὐλογον）」という点にある。そして、これらの「基本的なよい感情（プロトス・エウパテイア）」には、「それらに帰属するもの」が

あるとして、以下のように続けられている。

証言 35

「基本的な感情の下にいくつかの感情が帰属しているように、これらの基本的な「よい感情」の下にも同様に、それらに帰属するいくつかのものがある。すなわち、「願望」の下には、好意、親切心、温情、そして愛情が、また「用心深さ」の下には、慎みと崇敬心が、さらに「喜び」の下には、うれしさ、快活さ、朗らかさが、それぞれ帰属するのである」DL.7.116

じつに多くの感情が語られているように見える。そうだとすると、これらの「よい感情（エウパテイア）」を認めることは、「感情のない状態（アパテイア）」を主張することと両立するのであろうか。たしかに、ストア派自身が、ここで挙げられている「エウパテイア」のいくつかについて、他の箇所でも、「喜び（カラ）や快活さ（エウプロシュネー）やその種のものは徳に付随して生じる」（DL.7.94）と語っているのである。そうだとすると、あくまでも一時的に生じたものであり、ストア派が否定する「全面的に支配された状態」とは区別されるかもしれない⁽³⁰⁾。しかしそうであったとしても、繰り返し語られる「すべての感情を取り除く」という立場とは相容れないのではないか。この矛盾に、遅くともプルタルコスはずづいていたようである。プルタルコスによる「アパテイア」への批判はすでに第2章で取り上げたが、さらに「よい感情（エウパテイア）」を語るストア派の立場を、プルタルコスは次のように批判しているのである。

証言 36

「しかしながらその一方で、彼ら〔ストア派〕自身、自分たちの言う「喜び」や「願望」や「用心深さ」を「よい感情（エウパテイア）」と呼んで、

「感情のない状態（アパテイア）」とはしていないのであるが、この場合には名辞を正しく用いている。というのは、よい感情が生じるのは理性の働きが感情を否定し去ることはせず、思慮分別ある人の内部でこれを調整し、規律あるものにする場合なのであるから」プルタルコス『性格の徳について』 449b

つまり、「アパテイア」ではなく「エウパテイア」という名辞のほうが、ストア派の立場を説明するのにふさわしいのではないか、そうプルタルコスは指摘しているのである。そしてそれは「感情を否定」することではなく、感情を「調整し規律あるものにする（κοσμοῦντος καὶ τάπτοντος）」ことだとプルタルコスは言う。もしそうだとすると、「よい感情（エウパテイア）」を認めるストア派の立場は、内容としては、証言 24 において感情を「整えること（κοσμηῆσαι）」を主張していた論敵の立場と変わらないことになるだろう。

4-2. キケロ

では、「基本的なエウパテイア」として挙げている「喜び」「意欲」「慎重さ」とはどのような心のあり方なのであろうか。またそれらの特徴である「理にかなっている（エウロゴン）」とは何を意味しているのか。キケロの『トゥスクルム荘対談集』をもとに考察を続けよう。まずキケロは、ゼノンによるストア派の感情の四分類（証言 14）を以下のように説明する。

証言 37

「感情の分類に関しては、彼ら〔ストア派〕は次のように考えている。すなわち、それは二種類の思いなしによる善（opinatis bonis）と二種類の思いなしによる悪（opinatis malis）に起因し、合計四つに分類される。その善からは「欲望（libido）」と「快楽（laetitia）」が生じる。快楽は現在の善

に起因し、欲望は将来の善に起因する。その悪からは「恐怖 (metus)」と「苦痛 (aegritudo)」が生じる。恐怖は将来の悪に起因し、苦痛は現在の悪に起因する。人は将来の悪に恐怖を感じ、切迫する悪に苦痛を覚える」

Tusc.4.11

これら四つ以外の他の感情はすべて、これらの下位に位置づけられることになるのであるが、これら四つの感情「欲望」「快樂」「恐怖」「苦痛」に対応する形で「よい感情」が説明される。「善に見えるもの (quod videtur bonum) に向かって、言わばそそのかされ、火をつけられるようにしてつき進んでいくことである」(Tusc.4.11) ところの「欲望」に対しては、「何かを理性でもって欲求する」ところの「願望 (voluntas)」が対置され、「求めているものが手に入ったとき、われを忘れ、夢中になることである」ところの「快樂」に対しては、善きものに向かい「魂が理性をともない (cum ratione)、静かに穏やかに動く」(Tusc.4.11) ところの「喜び (gaudium)」が対置される。また、悪と思われるものに直面し「いやしくみじめな臆病を伴う忌避」である「恐怖」に対して、その回避が「理性を伴う」場合に「用心深さ (cautio)」と呼ばれるのである。最後の、思いなしによる悪への「苦悩」に対する「よい感情」は存在しない。なぜなら、現実の悪に悩まされることはそもそもありえないからである。そのことをキケロは次のように言う。

証言 38

「知者は現実の悪に感情を抱くことはない。苦痛は患者のものである。患者は思いなしによる悪の中で (in malis opinatis) 苦痛に苛まれ、理性に従わず、魂を委縮させる。それゆえ、理性に反する魂の委縮と言うのが、苦痛の第一の定義となる。以上のように、感情には四つの種類があり、魂の安定 (constantia) には三つの種類がある。なぜなら、魂の安定には、苦痛に対置すべきものがないからである」 Tusc.4.14

以上のことから明らかなように、キケロは「よい感情」の特徴を「理性を伴う」と説明している。それは先の「エウロゴン」に対応するものであろう。また、キケロが言う「思いなしによる」とは、ストア派が言う「誤った判断（ヒュボレープシス）」に対応する。キケロは「すべての感情は判断への同意であり、思いなしに起因する」（Tusc.4.14）と述べ、感情を「精神全体としての（*tota mente*）正しい理性からの欠損」（Tusc.4.22）と考える。そして、「感情はいかなる自然の力によって動かされている事態でもない。それらはすべて思いなしであって、弱さを伴った判断である。したがって、知者は常に感情から逃れているだろう」（Tusc.3.35）と述べ、「感情のない状態」という立場を、改めて主張するのである。つまり、「喜び」「意欲」「慎重さ」は、理性による正しい同意、善悪についての正しい判断にもとづく知者の心のあり方なのである。

では、キケロにとって「感情のない状態（アパテイア）」と「よい感情（エウパテイア）」の両立はどのように説明されるのであろう。おそらく、その困難さにキケロは気づいていたと思われる。そのことは、先の証言 38 において、キケロが「エウパテイア」を *constantia* と言い換えていることから読み取ることができる。

constantia というラテン語は、先の引用では「（魂の）安定」と訳されているが、「エウパテイア」との関連では「確固さ」と訳されることもある⁽³¹⁾。さらに知者の心のあり方として語られる場合「恒心」などという訳語が用いられることもある。ただ、キケロによる『トウスクルム荘対談集』における用例をみると、決して特別な言葉ではないようである。もっとも広い意味としては、心の動じないあり方を指すようであるが、それは時として、日本語の「意固地さ」に該当する意味で用いられることもあり（Tusc.2.5）、そこでは、辞書によると悪い意味で用いられることが多い *pertinacia* というラテン語に言い換えられている。一方、理性的な判断の「一貫性」が称賛されるような場面で用いられることもある（Tusc.4.31）。さらには徳の一つとして、勇氣や知恵と並列される場合もあり（Tusc.5.13）、その場合、日本語では「節操」

と訳される⁽³²⁾。そして以下の主張もその用例の一つである。

証言 39

「それゆえ、節度と節操を通じて (*moderatione et constantia*) 魂の平静さを保ち、自分自身の折り合っている者は、誰であれ、苦痛に煩わされることも、恐怖に打ちひしがれることも、乾いたように何かを求めて欲望に身を焦がすことも、はかない快樂におぼれてしまうこともない。こういう者こそ、わたしたちの求める知者であり、幸福な者である」 Tusc.4.37

またキケロは別の箇所でも、「心の安定は知識から生じるように、感情は迷妄から生じる (*ut constantia scientiae, sic perturbatio erroris est*)」(Tusc.4.80)とも述べている。つまり、*constantia* の用例のうち、徳として語られているものに注目すると、それを「感情」とは対立するものとしてキケロは理解していることが読み取れる。しかし、その言葉を「エウパテイア」の訳語として用いることは、二つの点で、問題が生じるのではないか。一つは、パトスという意味がまったく読み取れなくなってしまうことである⁽³³⁾。だがしかし、それは先の矛盾を理解したうえでの意図的なことであろう。もう一つの問題は、証言 39に見られるように、*moderatio* (節度) とともに、それがストア派の知者として説明される点である。第3章でみたように、ストア派は *modus* (限度) を定めることの困難さを主張し、感情の *moderatas* (節度) がありえないことを主張する立場であった。にもかかわらず、*moderatio* と *constantia* を認めるとするならば、その *constantia* の内実は、ストア派が批判する「節度ある感情」と実質的に重なってしまうのである⁽³⁴⁾。キケロは別の対話篇の中で、登場人物に「ストア派とペリパトス派の論争は事実ではなく言葉にかかわることにすぎない」⁽³⁵⁾、あるいは「ストア派とペリパトス派は、表現の仕方こそ異なるけれども、内容的には同じ考えを持っていると思われる」⁽³⁶⁾などと語らせている。それらを踏まえると、キケロ自身もまた、

両者の立場の近さに気づいていたと思われるのである。

おわりに アパテイアとメトリオパテイアの序列化

アパテイア概念をめぐる論争をこれまで考察してきた。その際、まずアパテイア概念に向けられた批判の二つの論点を確認し、考察の出発点とした。それは、

論点1 「感情のない状態（アパテイア）」は不可能である。

論点2 必要な「感情（パトス）」が存在する。

である。そしてアパテイアを主張するストア派からの直接的な反論は以下であった。

論点1に対して 「節度ある感情（メトリオパテイア）」こそ不可能である。

論点2に対して すべての感情（パトス）を取り除くべきである。

しかし、論点1に関しては、ストア派自身、アパテイアの困難さを認めていることが、論点2に関しては、「エウパテイア」を語ることにより、実質的に「節度ある感情」を認めているように見えることが、これまでの考察によって示された。そしてその二つの結論は、やがて両概念の序列化へとつながったように思われる。すなわち、アパテイアを「人間を超えた神的な徳」とみなし、高次の領域におくことによってその困難さを認め、メトリオパテイアを「人間に可能な徳」として、アパテイアの下に位置づけるのである。このことは中期プラトン主義者において見いだされるようになり、さらに後の新プラトン主義者たちにおいて顕著となる。その点については稿をあらためて考察することにした。

凡例

本論文で取り上げた古代の文献に関しては、TLG Texts, PHI Latin Corpus を用い、次の翻訳を参照、ならびに引用させていただいた。論旨の都合上、訳語

や文章において変更を加えさせていたでいる。また、本文中において頻出する著作は、() で記した略語によって表記している。

プラトン『国家』(藤澤令夫訳) 岩波文庫、1979 年。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』(朴一功訳) 京都大学学術出版会、2002 年。

キケロ『トゥスクルム荘対談集』(木村健治・岩谷智訳)『キケロー選集 12』、岩波書店、2002 年 (Tusc.)。

セネカ『怒りについて』(兼利琢也訳)『セネカ哲学全集 1』、岩波書店、2005 年 (Ira.)。

プルタルコス『倫理的徳について』(戸塚七郎訳)『モラリア 6』 京都大学学術出版会、2000 年。

プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』(戸塚七郎訳)『モラリア 13』 京都大学学術出版会、1997 年。

(擬) プルタルコス『アポロニウスへの慰めの手紙』(瀬口昌久訳)『モラリア 2』 京都大学学術出版会、2001 年。

アルキノオス『プラトン哲学の概要』(久保徹訳)『プラトン哲学入門』 京都大学学術出版会、2008 年。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(加来彰俊訳) 岩波文庫、1984-1994 年 (DL)。

『セネカ哲学全集』(大西英文他訳) 岩波書店、2005-2006 年。

『初期ストア派断片集』 1-5 (中川純男他訳) 京都大学学術出版会、1998-2006 年。

Arnim, H.von, ed. *Stoicorum Veterum Fragmenta*, Stuttgart, 1903-1905. (SVF)

Heylbut, G., ed. *Aspasii in Ethica Nicomachea quae supersunt commentaria*. Berolini. 1889.

Long, A.A. & Sedly, D.N., *The Hellenistic Philodopers*, vol.1, 2, Cambridge, 1987. (LS)

注

- (1) ヘレニズム時代は、年代的な区分としては、ドロイゼン以来、前 323 年のアレクサンドロス大王の没後、前 30 年に地中海一帯がローマによって統一されるまでの約三百年の時期を指す。しかしドロイゼンが語った「ギリシア文化の拡大」(Droysen, J.D., *Geschichte des Hellenismus*, I, 1836, S.3) は、それ以降にも及ぶ。本論では、紀元後 3 世紀あたりまでを「ヘレニズム時代」とみなす。
また、本論は、2016 に発表した論文「節度ある感情（メトリオパテイア）」をめぐる考察 (1) ——問いの発端と概念の由来」の続きとして構想していたが、主題がより限定的となったために、それとは独立した形で発表することにした。そのため、一部ではあるが前論文と論旨が重なる箇所があることをおことわりしておきたい。
- (2) 岩崎 p.79. 他に「脱感情」などとも訳される(堀田彰『エピクロスとストア』清水書院、1989, p.203)。
- (3) DL.7.167.
- (4) 納富 p.415.
- (5) アリストテレス『ニコマコス倫理学』1119a20、1125b30.
- (6) デイオゲネス・ラエルティオスによると「クレアンテスはゼノンの門に入ってから、まことに健気な心掛けで哲学に励み、最後まで同じ教義を守り続けた」(DL.7.168) と言われる一方、「クリュシッポスは、非常に多くの点で、ゼノンばかりではなく、クレアンテスとも意見を異にした」(DL.7.178) とされる。本論では、特に意見の異なりについて言及する必要がある場合にのみ、文中、あるいは注でそれに言及するが、基本的には、「ゼノンに帰されることと彼の後継者たちに帰されることを厳密に区別するのはむづかしいが、ストア学派の根本的な教義の大半はゼノンによるものである」(グリナ p.19)、さらには「クリュシッポスが、実質的な面で彼ら〔ゼノン、クレアンテス〕と大きく異なっているとは考えにくい。ストア派の道徳哲学を洗練し、体系化することが、おそらくはこの領域での彼の主要目的であったのだろう」(ロング p.279) という解釈に従う。
- (7) Tusc.4.9
- (8) DL によると、ゼノン、クリュシッポスの他にも、ヘリロス、スタイロスによっても『感情について』という本が書かれたようである。

- (9) 『初期ストア派断片集 1』 p.150-151.
- (10) 「古アカデメイア派」という表現は、キケロによるものである。アルケシラオスに始まり、懐疑主義の立場をとった「中期アカデメイア派」との区別が念頭に置かれている。ただ、キケロはアリストテレスを「アカデメイア派」と呼ぶ場合もある、それはアリストテレスが学園アカデメイアに属していた時期があることによる。
- (11) Dillon, p.226-227.
- (12) 「古アカデメイア派」とは、アルケシラオス以降の懐疑主義的な立場をとった「新アカデメイア派」と区別して、キケロが用いる表現である。キケロは時として、アカデメイアで学んだアリストテレスもそこに含める（『善と悪の究極について』 5.7 参照）。その際には、アリストテレスの「中間」という立場がしばしば混入している。
- (13) Graver (2002) p.188.
- (14) 久保 p.168.
- (15) 中畑 p.481.
- (16) 「この魂の主導的部分が同一でありながら異なった働きをするという考え方は、ストア派に固有の、類を見ないあり方」（『初期ストア派断片集 4』 p.273, n.1）と言われる。一方、ストア派の歴史において、中期ストア派ポセイドニオス（135-51）はクリュシッポスを批判して「感情的部分」の存在を主張したとも解釈されることもある（LS.65M）。しかし、本論の考察で示されるように、キケロやセネカにおいても「全体として」という立場が保持されており、それをストア派の基本的な立場とみなす（cf.Tielman, 198ff.）。
- (17) プルタルコスの続く説明によると、一部のストア派は「理性と感情の差異や対立は存在せず、一つの理性の両方向への転向がある」（446F）と主張するようであるが、「全体として」の変化という点では同じ主張であると思われる。
- (18) アエティオス『学説史』 4.21（SVF II 836）。
- (19) Sharples, p.22.
- (20) 拙著「キケロの懐疑主義」『アルケー・関西哲学会年報』 24（2016）参照。
- (21) ギリシア語のパトスはラテン語の直訳では *affectus* となる。それぞれ純粋に「何かを蒙った状態」を意味する。ギリシア語の「パトス」は、悪しきものを蒙った場合、「不幸 *misfortune*」「病 *morbid affection*」といった意味を持ちうる。それらをふまえてキケ

ロは、「ギリシア人たちが「パトス」と呼んでいるものに対して、わたしたちとしては morbis よりは perturbatio という言葉をあてたほうがよいと思われる」（4.10）と述べ、confusion, disorder, disturbance といった、もともと否定的な意味を持つ語を当てるのである。それは日本語では「惑乱」の他、「攪乱」（『ストア派断片集 4』 p.263）などと訳されるが、本論では「パトス」とのつながりを重視し「感情」と訳す。

- (22) 両学派の対立が明確に示されるのはキケロにおいてであるが、すでにテオフラストスにおいてストア派の用語が見られることから、論争は早い時期から行われたと推測されている（Fortnbauch, 204）。
- (23) Graver（2002）p.163, 木村、岩谷『キケロ哲学選集 12』 p.173.
- (24) 「怒り」の有用性をめぐる議論において、ラテン語 ira および iracundia に該当するギリシア語は、証言 21 に見られるようにテューモスである。だが、ストア派における感情の分類ではオルゲーというギリシア語も見いだされる。ディオゲネス・ラエルティオス、およびキケロによる両概念の区別についてはほぼ一致しており、感情の最上位の区別である「欲望」に属し、「オルゲーとは、不当な仕方て不正を加えたと思われる人に復讐したいという欲望」（DL.7.133, cf.Tusc.4.21）と、そして「テューモスとは、始まったばかりのオルゲー」（7.114, cf.Tusc.4.21）と定義される。またプラトンにおいては、テューモスは勇気の徳と関連し、「不正なことをされていると考えるときに」（『国家』 440c7）生じ、その際には「理性の味方となる」（『国家』 440c4）と説明される。セネカは、怒りの必要性をアリストテレスの議論とみなしているが（Ira.1.9.2）、アリストテレスの現存する著作に対応する箇所は見いだされない。ただ、「テューモスに基づく勇気が最も自然なものである」（『ニコマコス倫理学』 1117a4）といった言及はみられる。
- (25) セネカ『道徳書簡集』 75.12.
- (26) エピクテトス（50 頃 -135 頃）においては、「プロパテイア（前感情）」とも表現される（『語録』断片 9）。
- (27) プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』 1041F（SVF III 545）
- (28) 他に、「それはごくまれに、長い年月の隔たりをにおいて一人しか出てこない」セネカ『知者の恒心について』 2.7.1、「いわれるような知者は地上のどこにもいないし、これまでもいなかった」プルタルコス『共通観念について』 1076B。

- (29) クリュシッポスが「エウパテイア」の一つである「エウラベシア」を著書『法について』で言及していることから（プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1037F（SVF Ⅲ 175）、クリュシッポスの立場である可能性が推測されている（LS2.p.407）
- (30) LS2, p.407.
- (31) 『初期ストア派断片集 4』 p.263.
- (32) セネカにおいては、「カルテリア（忍耐強さ）」のラテン語訳として用いられることもある（『幸福な生について』『セネカ哲学全集 1』 p.327, n.4）。その言葉は本論文文中にも証言2、証言3に見られ、キュニコス派、さらにはソクラテスにさかのぼることができるようであるが、ストア派では「人が耐えるべきことと耐えるべきことではないことに関する知識ないしは状態」（DL.7.93）と定義される。
- (33) 近年の解釈として、Nussbaum はセネカ『道徳書簡集』23をもとに、エウパテイアの心のあり方が「厳粛さ」と語られていることから、感情とはまったく異なる仕方、すなわち身体的変化を伴わない仕方を感じ取られるものとみなす（p.172-174）。しかし、エウパテイアは高揚感を伴うものであることは証言34において明確に語られており、説得的とは思われない。
- (34) 廣川氏は両立場の類似について、アリストテレスが感情のしかるべきあり方を徳とみなしているのに対して、「ストア派において「よい感情」は、それにおいて徳の成立する要素とまでは認められていない」（廣川、p.231）として、感情の意義に決定的な違いを指摘している。その際に注目されるのが、ストア派においては「よい感情」が「あとから生じてきたもの（ἐπιγέννημα）」（DL.7.94）と語られている点である。しかしながら、アリストテレスも、徳に従った活動に快楽が生じることを、快楽が「活動に付随する（ἐπιγινόμενον）一つの目的として」（『ニコマコス倫理学』1174b34）生じると述べ、そこでは同様の言葉が用いられている。そのことから、両立場はよい感情の成立、および意義を同様に理解していたと解釈できるだろう。
- (35) キケロ『善と悪の究極について』3.41. アカデメイア派のカルネアデスの主張として語られている。
- (36) キケロ『神々の自然本性について』1.16. アカデメイア派に属するコッタの発言として語られている。『義務について』1.2 も参照。

参考文献

岩崎允胤『ヘレニズム・ローマ期の哲学』未来社、1995 年。

A.A. ロング、金山弥平訳『ヘレニズム哲学』京都大学学術出版会、2004 年。

ジャン＝バティスト・クリナ、川本愛訳『ストア派』文庫クセジュ、2020 年。

中畑正志「プラトン哲学・アリストテレス哲学の復興」内山勝利編『哲学の歴史 2』中央公論新社、2007 年。

納富信留『古代哲学史』筑摩書房、2021 年。

廣川洋一『古代感情論—プラトンからストア派まで』岩波書店、2000 年。

Dillon, J., *The Heirs of Plato*, Oxford, 2003.

Fortenbaugh, W.W., “Arius, Theophrastus, and the *Eudemean Ethics*” in *On the Stoic and Peripatetic Ethics*, New Brunswick & London, 1983.

Graver, M.R., *Cicero on the Emotion*, Cicago, 2002.

——, *Stoicism and Emotion*, Cicago & London, 2007.

Sharples, R.W., *Peripatetic Philosophy 200BC to 200AD*, Cambridge, 2010.

Tieleman, T., *Chrysippus' On affections*, Leiden, 2003.

Nussbaum, M., “The Stoics on the extirpation of the passions”, *Apeiron* 20, 1987.

付記 本論文は 2022 年度龍谷大学国内研究員の研究成果の一部である。